

特116

709

難波

兼平

千手

辛都婆小町

紅葉狩

觀世流改訂謄本

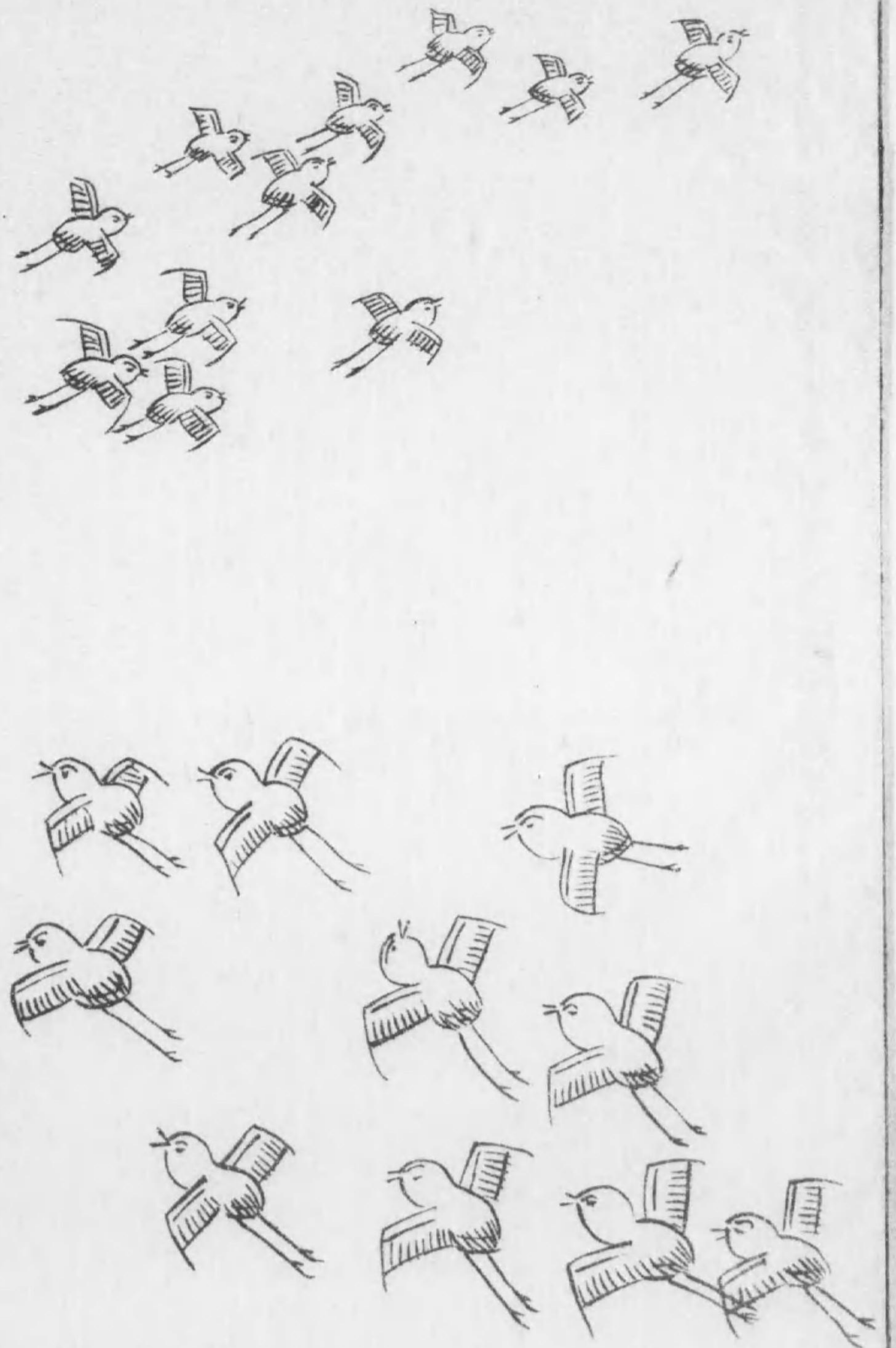
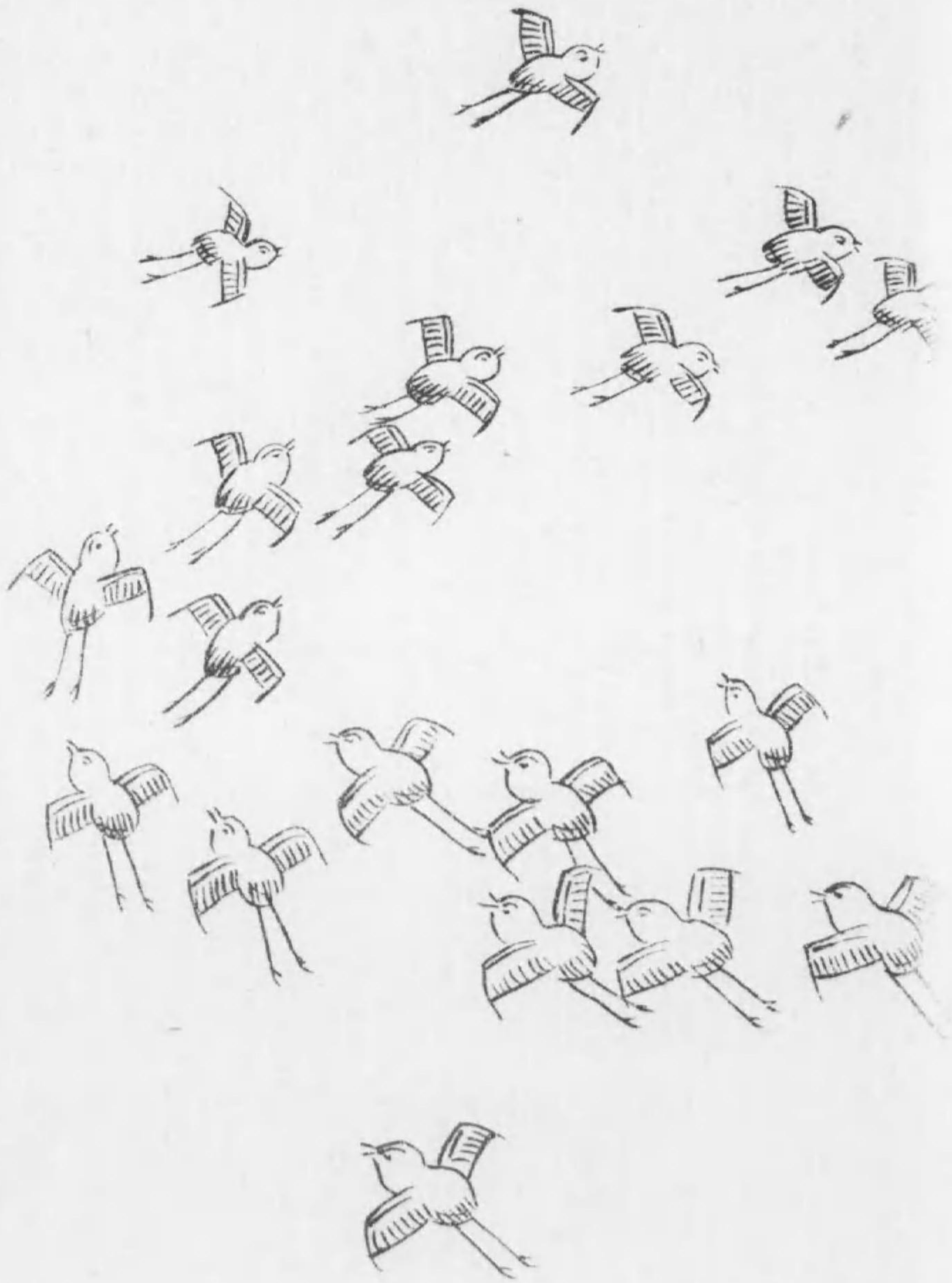
由二



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 50 1 2 3 4 5

始







清觀
之印



文學博士

明治四十年

井上

國本

文監

訂正

丸岡

世清

之節

訂正

大正五年

丸岡

樂堂

解解

并補訂

山崎

樂堂

拍子

附訂正

天正十一年

山崎

樂堂

拍子

附再訂正

難波

解題

官人難波の里に至りたるに、王仁の靈梅の精と共に現れて仁徳天皇の著語をなし、又本草
間耶麻の神靈と共に神代を祝ひて舞樂を奏す。古今集の序に出でたる難波津にさくやこの花
冬じしり今や春と咲くふこの花の歌を基として

謡ひ方梗概

高砂に似て高砂ほど重らざる。全篇に重り陽春の心を著とし森平の
神代玉璫氣溢る。如く社殿にして且雄大なる謡ひぶりなるべし

なれども實は王仁の靈なり。高砂の前シテと似たりともそれは神松の精、これは場化の博士の七魂を
は其間自ら起の相違あるべきあり。まづ出の一聲に充分に音を抑へて地み無きやう、まかと靜に大き
に氣を更へて後め。上歌を長閑にどつしりと進ふ。心ぞいりるき……の返しはツレ一人に進ませシテ
は息を休め、天つ日朝と又連吟にふる。凡てツレとの連吟は呼吸を一にして声の分れざるやうにし、息
を絶つまじき所は何れか一人の息にありて結ぎ、餘韻連綿たるやう注意をべし。ワキとの問答、位を保
ちて奥之能の重みを忘るべからば、語り答へて行く間に漸次氣を束せ、立つ波とと中音を抑へて地に
渡す。次のサシは心持を新にし、クリ地は位よりと進ふ。地波の三字落しは少し抑ふ
る心に振ふ。君君をればは素直なるべし。クセの上端、重なる調子にて氣を張つて進ふ。前のロンキ
は地との受渡り好く乗り心を以て進ふを宜しとす。此あたり少したても運びの粘る事あるべからば、
後の出はサシの調子にて晴々しく社大入迄無く進ふ。ノリ地以下凡て氣を束せて長閑ふめをたし進ふを
宜とすべし。後のロンキは祝言の心を本とし、剛社に雄大に調子好く振ふるなるべし。

ツレ

前ツレは男姿なれど優ふる梅花の精、後ツレは梅花の神なる木華胡那麻、何れも華に神靈を
屬として扱はる。常のツレよりは少し由緒ある程に進ひなをべし。シテとの連吟はシテも桂つ

ワキ

位大きく勢ありて、生き
の位を持してまかも社殿に氣高く進み心を著として進ふべし。

地

一の地「難波津に……」は天下森平を祝ふ心か
は調子好くさらりと運んで強々と進ふ。クリ

は氣を更へて少し調子を高めにとり節大きく運び好く進ふ。クセは稍静めて出、然ればより漸次運びを
附け、通じて進ふと進ふ。上端以後は破し位なるべし。ロンキは再び氣を更へ、返しより稍乗り心に

難波

ものふるふ、世治りて其用無きに至り昔に任せたるをかく云へり。時守りと難波の鳥何はにかけたる語
 續けたりは諫に用るゝ鼓の軍に時を知りて其果とありしに云ひかけたるあり。秋風樂、萬歲樂、青海波、採桑老、拔頭、
 いのなり 時の調子時に配したる 鳥の意 音樂の調子。 唐樂の陵王といふ曲。陵王は一に没日還于樂と云ひ、
 皆唐樂 入日を返す舞の手 没日を午時に返して戦に勝ちたる事を作れる曲あり。聖人
 の曲名 御代にまた出下 萬歲樂、賢王の世に出づる時必を風風来りて賢王万歳々々と轉るを例とせら、
 其轉詞を樂に作りたるものありと教訓抄に見ゆ。こゝには此曲意を引きて
 唐代に天皇を祝ひて云へらるものなるべし。

脇能

難波

正月

前ツレ男 後ツレ 木華開耶姫
シテ王 仁(前ハ老翁)
ワキ臣下

早次舞上
(三人)
ツヨク

山も霞みて浦の春。山も霞みて浦
 の春。浪風静ありけり 抑これの當

今よはへ奉る臣下あり。われ三熊野を

信じ。毎年年ごもり仕の。此度の諸願

成就し。年おくる春もあつらん。唯

今都よ下向仕の。春まらやびも

道行上
(三人)
打切ヤ

きい日影あまねく日嗣のは調物。運ぶ
巻や都路の直あるは代を仰ぐんと。
南の戸をいで千里まであまねく照きて
日影あまねく照きて日影あま。

早付

此方の事いひては此方いひて
此方の事いひては此方いひて
此方の事いひては此方いひて

備よかして

梅の枝陰をまらきらきらして。陰を清め
賞翫志給ふ事不審あり。も一此梅の
名本よこのり。此姿を見奉れど。
都のくもて出座のら。此難波の浦よ
おいて。色殊ある梅花を法臨して。
名本よこのり。此姿を見奉れど。
名本よこのり。此姿を見奉れど。

備よかして

シテ白

していつい帝をさく歌のふ詞にあらざり
 たり。難波のなみにおもひあはれ。まだ信よ
 即き給さるべ。冬咲く梅のたのしみ
 制即位あつて難波の君の位よそあたら
 給ひ一時の今いつ時のたのしみ
 早から上 天下の春をさくらめせら 今春と
 咲くやこのたの盛の大鷓鴣の

●小 詠

帝をさく歌の風をあらわ
 立つ浪も 難波津よ 咲くや木の花
 冬ごもりつ 咲くや木の花 冬ごもりつ 今
 春よ 白ひわいて 吹けとも 梅の風 枝を
 鳴かぬは 代とも ちかづ 津の國の あり
 さの事 ことばの ことばの ことばの ため
 一いつい ちかづ 首 首 首 首

● 獨吟サシクセ

廣き海あり。折難波津の歌の帝の
 序は。又安積山の詞の采女の
 土器。とうぐあり。昔唐國の書
 舜の代も越えつる。萬機の
 まつごとと穩かみ。て慈悲の浪
 四海は普く。治めざる。平らあり
 君君たれば。臣も亦。水よく船を浮む。

とあや。高き屋は登りて見れば煙
 まら。民のかまどの賑ひはけりと。廠慮は
 かけまきも。あたけを聞く。聞えける。然
 れ。此君の代も。たぬ。たぬ。事も
 げ。あり。おたぬ。たぬ。の。國は。昔く
 三年のは。調ゆる。其年。月も。極
 ま。い。濱の。真砂の。敷つ。も。り。て。雪は

豊年のは調物。ゆるき故よあらく
 とやまよはこぶは寶の千秋萬
 歳の千は相の玉を奉る。然のハ昔ま
 地のちのちつろく又深くして。所の外
 まて浪もあく。ひろき所。惠筑波山の
 かげおりも。敏きいは影ハ大君の國
 ありまよの本も。葉え葉の津の國の

地拍子
 一・二・三・四・五・六・七・八・九・十
 (カ)

難波の梅の名のあよ。白も四方よ
 普く。花開く。つら下みる。春あれ
 や萬代の猶安全ぞめでたま。げよ
 萬代の春の花。げよ萬代の春の花
 葉え。難波津の昔語ぞ。面白き
 げよ名の。あよ難波津よ。鳥の一聲
 ちりもよ。鳴く。鶯の春の曲。春鶯鳥轉

難波

を奏せし^{地上}か^{地上}も^{地上}や^{地上}身^{地上}誰^{地上}あ^{地上}ら^{地上}ば
 か^{地上}く^{地上}い^{地上}あ^{地上}る^{地上}花^{地上}の^{地上}曲^{地上}舞^{地上}樂^{地上}を^{地上}奏^{地上}し^{地上}給^{地上}よ
 べき^{地上}あ^{地上}ら^{地上}ん^{地上}知^{地上}ら^{地上}ぎ^{地上}て^{地上}や^{地上}此^{地上}梅^{地上}の^{地上}春^{地上}年^{地上}の^{地上}
 花^{地上}の^{地上}精^{地上}今^{地上}人^{地上}の^{地上}老^{地上}人^{地上}の^{地上}今^{地上}ぞ^{地上}あ^{地上}ら^{地上}
 さま^{地上}難^{地上}波^{地上}津^{地上}よ^{地上}咲^{地上}く^{地上}や^{地上}本^{地上}の^{地上}花^{地上}と^{地上}詠^{地上}し^{地上}
 つ^{地上}位^{地上}を^{地上}さ^{地上}し^{地上}め^{地上}申^{地上}せ^{地上}し^{地上}百^{地上}濟^{地上}國^{地上}の^{地上}仁^{地上}
 あ^{地上}れ^{地上}や^{地上}今^{地上}も^{地上}本^{地上}の^{地上}花^{地上}は^{地上}戲^{地上}れ^{地上}百^{地上}轉^{地上}の^{地上}聲^{地上}

口上歌
 (三人)
 待談
 打切ヤ

ま^{地上}て^{地上}春^{地上}の^{地上}鶯^{地上}の^{地上}舞^{地上}の^{地上}曲^{地上}夜^{地上}も^{地上}も^{地上}お^{地上}ら^{地上}
 慰^{地上}め^{地上}申^{地上}さ^{地上}べ^{地上}し^{地上}や^{地上}下^{地上}座^{地上}し^{地上}て^{地上}待^{地上}ち^{地上}給^{地上}く^{地上}
 花^{地上}の^{地上}下^{地上}が^{地上}し^{地上}て^{地上}待^{地上}ち^{地上}給^{地上}く^{地上}
 見^{地上}て^{地上}暮^{地上}ま^{地上}花^{地上}の^{地上}下^{地上}座^{地上}更^{地上}く^{地上}る^{地上}夜^{地上}の^{地上}花^{地上}の^{地上}
 下^{地上}座^{地上}更^{地上}く^{地上}る^{地上}夜^{地上}の^{地上}日^{地上}影^{地上}も^{地上}も^{地上}静^{地上}あ^{地上}る^{地上}
 氣^{地上}色^{地上}し^{地上}よ^{地上}そ^{地上}ら^{地上}び^{地上}て^{地上}音^{地上}樂^{地上}の^{地上}花^{地上}は^{地上}聞^{地上}ゆ^{地上}る^{地上}
 花^{地上}は^{地上}聞^{地上}ゆ^{地上}る^{地上}花^{地上}は^{地上}聞^{地上}ゆ^{地上}る^{地上}花^{地上}は^{地上}聞^{地上}ゆ^{地上}る^{地上}

鶯ウ。春ハ。サシ。ケテ。て。鳴ナ。けシ。とシ。もテ。やシ。わシ。らシ。んシ。のシ。かシ。
 鼓ツのシ。若カむシ。しテ。て。打ウ。ちシ。あシ。らシ。まシ。きシ。打ウ。ちシ。あシ。らシ。まシ。きシ。
 人ヒもシ。あシ。けシ。いシ。ぬシ。いシ。ぬシ。君キ。がシ。代シ。よシ。ちシ。かシ。けシ。ーシ。鼓ツもシ。
 時トキ守モリのシ。ねシ。むシ。りシ。覺サ。むシ。らシ。難ナ。波ハのシ。
 鐘カネもシ。郷キョウ音オンきシ。浦ウラのシ。朝アサのシ。浪ナミのシ。聲コエぶシ。
 入イ。江エのシ。松マツ風カゼ。むシ。らシ。蘆アシのシ。葉ハ音ネ。いシ。づシ。
 れレをシ。聞ク。くシ。もシ。よシ。ろシ。いシ。づシ。のシ。諫カ。鼓ツ若カむシ。

難ナ。波ハのシ。鳥トリもシ。鶯ウ。かシ。ぬシ。はシ。代シ。あシ。りシ。がシ。
 たタ。やシ。あシ。らシ。面オモ。白シロのシ。音オン。楽ガク。やシ。時トキのシ。調テイ子シよシ。
 ちチ。たタ。とト。りリ。てテ。春ハル。鶯ウ。轉マシ。のシ。樂ガク。ちチ。ぶブ。春ハル。風カゼとト。
 もモ。ろロ。とト。もモ。よヨ。花ハナをシ。散チ。らシ。しシ。とト。らシ。とト。打ウ。ちシ。らシ。
 秋アキ。風カゼ。樂ガク。いシ。らシ。よヨ。やシ。秋アキのシ。風カゼもシ。ろロ。とト。もモ。よヨ。
 浪ナミをシ。郷キョウ音オンかシ。とト。らシ。とト。打ウ。ちシ。らシ。萬マン。歳サイ。樂ガク。ハシ。
 よヨ。ろロ。づヅ。打ウ。ちシ。らシ。青アヲ。海ウミ。波ナミとト。らシ。あシ。をシ。海ウミのシ。

舞

シテ 波きて打つる。採桑老 抜頭の曲ハ
 シテ 地 入日 招き返き手よ。入日
 招き返き手よ。今の太鼓ハ浪あひん。
 寄うてふ打ち返うてふ打ち。此音楽よ
 ひかれつ。取人代よ又出で。天ドを
 守り治むる天ドを守り治むる萬歳
 樂ぞめでたま萬歳樂ぞめでたま。

兼平

解題

本曾の傳、義仲の跡を弔はんとて江州東津野に至りたるに、義仲の家臣今井兼平の亡霊現
 れて主従の最後を物語り。平家物語、源平盛衰記などによりて作りたる曲なり。兼平は義仲
 の傳の子にて樋口次郎兼光の弟なり。此曲兼平が義仲の跡を弔はんとしたるに、兼平の亡霊来りて、おの
 き跡を弔はん為の遺志といふは異様なれど、これは傳承の間に字句に變遷をまじたる為の矛盾なるべし。

謡ひ方梗概

身分も重からざる戦士の武勇をほ組みたる曲なれば、修羅
 物の中にても位稍軽く、勇勁を旨として謡ふべきものとす。シテ 前は竹生鳴に
 れどさのみ位取らず、普通の老舟夫の心にて足る。一声の出は抑へて静に強へど、餘り重くなり過ぐる
 は宜しからず。ワキとの懸合は落着いて静にあつて、かゝるをりにも近江の海の此一句詞の如くに強
 い、次の連吟は稍確りと強ふ。ワキに名所を教ふる傳は前半中の強ひ所なれば取り合き心を籠むべきな
 り。比叡山といひ、揚殿といひ、總じて、詞は言外の風物を頭すに、つとめ、さかからず。一佛來の嶺と申
 すは以下下字に確りと強ふ。此懸合、終りの方は漸次詰める心あつて、後は修羅の本體なればつと
 めて雄壯に強ひ、然も粗末に陥るべからず。白刃骨を碎くの出はサシの調子にて、健やかにさらりと強
 ひ、雲水のより、一声の調子にて、節を大きく扱ふ。ワキとの懸合、稍もの柔かにどつしりとあつて、強
 マシはさらりと強ひ、以下クセまで變りず、クセの内初の上端は確りと強ひ、次のはさらりと強ふ。口
 ンギは締めて強ひ出し、順次に氣を
 掛け、寧はずむ心にて強ふが宜し。地 初のこれは又
 調子高からぬやう稍静に出づ。「念三十の」の二節は展望を強ふ處なれば前と調子を変へて朗かに浮き
 くと強ふ。此止メは粗末にならぬやう返シより稍静めて中入に強ひ、舟夫の亮と消え失せたる心持有
 るべし。後はシテに準じ、總じて勇健にさらりと強ふを宜しとす。ものくふのは少しく氣を掛けて強
 ひ、クリは調子を変へて節を大きく、節無き處はさらりと強ふ。クセは二段クセなり、出より上端
 前までを序の位にて稍ゆるやかに、此内、こは口惜しき、より少く氣を掛く。上端後より破の位にて
 前より運びを附け、二度目の上端以下は急の位にて前より更に進みて勢好く強ふべし。ロンギは調
 子を変へて初め程は稍ゆるやかに強ひ、漸次位進みシテとの呼吸の強みあつて、勢好く強ふべし。ロンギは調
 子からず。キリは氣を束せて勢好く強ひ、漸次位進みシテとの呼吸の強みあつて、勢好く強ふべし。

注意すべき謡ひ方

ハ枚表の「老少」にて前後不同の節は通常のクリ地に例シ、前附又強ひ方
 なる。前の入の後と中音に落し、同の終の音をサシヌは力、ルの中音

に於ける一字抑へに抑へて遠く、次の「夢幻」を再び上音に 前後不同 夢幻

辭解

本曾の行くへ

行くへはゆくて(行く方)の意。本曾路の末を尋ねたり。是を表

けて信濃と 本曾殿 本曾 義仲 粟津の原 藤所と藤田と 本曾の棧 かけはしは懸崖に通せ

道と云ふ類なり。橋に味す。本曾路は山間の峻路なりは古東越通を以て 其跡 名にし負ふは有名

の語より名にし負ふと續け、有名なる本曾の跡をさして云ふなり。 矢橋の浦 琵琶湖 憂きを身

に積む 憂きといふ法を本の名に見たりて、こがる 火の焦がり、意を舟の漕がらう、便船 舟

便船す 山田天橋の渡船 山田は矢橋につづける湖岸。古は矢橋山田よ 別の利益 佛教語を

の詞に用ふ。精別 如渡得船 法華經藥舌の詞。佛の慈悲は渡に船を得たる 法の人にて云

に幸を與ふる事。 山王二十一社 比叡山 山の名なりれども直に同山なる天名宗

の。戸津、坂本 坂本は叡山延暦寺に上る東坂の 比叡山 總本山延暦寺の名に代へて云ふ

それわが山は云々 叡山要記に「桓武聖主廢長岡京、遷平安城之時、雲峯時帝都之丑寅、嵐徑成

山爲皇帝本命通場。又天台座主慈鎮の教に「わが 一佛乘の巔 極致なる實大乘教を指す。

鷲の御山 天竺の靈鷲山。天台座主 天台山 延暦寺をいふ。震旦は支那なり。四明は大明一統志に「浙

唐土天台山と 傳教大師云々 元亨教書に「教最澄、世姓三津氏近州滋賀郡人也(中略)、初延暦四年秋七

七年於山頂創二字、名曰一乘止觀院」とありて、註に「今之中堂、所謂延暦寺也」とあり。傳教は最澄の大

師号なり。又大師が根本中堂を建立したる時の教に「阿耨多羅三藐三菩提(あのくたらさみさぼた)

の佛たちわがたつ松 大宮 大和の之輪明神を祀る。日吉神 橋殿 波止王塚とも書く。太平記に「今

に冥加ありせ給へ」 給ふ波止王塚なり。此故は波止つて土 一切衆生 涅槃經の文句。誰も成佛 佛衆生 佛と

濃(こまやか)なりとは書けるなり。 遮那の相 遮那は大日如來。傳教慈覺入唐して大日如來の三 止觀の海

衆生といふも要す 親院を建て、説き遺したる教に有る。 戒定慧の三學 禪譯名義集に出づ。証果をうるための修学

を澄ます禪定、 三塔 任時延暦寺の堂塔伽藍は山上下に多数ありしかば之を東西及横川の三所屬

真理を修む智慧。 塔に七百七十七人、横川に 一念三千 一念の心に三千の 圓融 支障とせざるもの無きこと。

四百七十七人ありしと云ふ。 上祀三塔の一。叡山横川谷の上嶺。北嶺とも 波 浪賀郡一帯の地の古名なりは志賀、大津をい

いふ。月の善き夜の韻を煮て横川に續く。 七社の神輿 廿二社の中の上七社の神輿。七社は大宮、二宮、三宮、

にて次にさい、波の水馴樟とありしも同語なりと、地名に用ひた 志賀、幸崎 志賀の里は今

る方はさい、波と清みて云ひ、實際の波の方はさい、波と濁りていふ。 白刃骨を碎く 殺の標

其東の湖岸。一つ松は幸崎にあつて 昔は「なきあとなほし」と詠へ 面影も夏山 「無」の音を

は坂河天皇の時根本中堂に振り上げて園向を呪理したること、又陽明門に振り込みたることとありし 破り 眼睛は腫なり。腫を破るとは 紅波橋を流す 紅波とは血潮の原ふを喻へし語。血の

梳に残花を乱す 染は水中に本を並べ水を寒きて魚を捕る装置。遺梳はこれに打ちたる梳なり。残花とは遺梳の枝に残りて紅に色づきたるを云へるなり。前に血の流を彼に壁へ
 たると、其場所が湖畔なりとにより、血の飛び散りて四遠を染 修羅の巻云々 戦死者は修羅道に
 のたろを遺梳に残花の散り乱れたる様に云ひたりたるを云ふ 修羅の巻云々 戦死者は修羅道に
 平死して修羅の巻に迷ひ、猶事關の苦患より脱し救へぬ状をいへる 見みえし 今夢
 なり。修羅道は二通の一。常に三十三天と戦へる阿修羅の世界なり 現に 幻の
 如く頭れたるに對し、前に湖上にて迷ひ 彼岸 佛教にて生死為彼岸、涅槃為彼岸といふ。迷
 たるを現といへり。うつとは現實の謂 彼岸 妻を脱し不生不滅の法身の眞証に帰する地境。
 有為生死云々 金剛經に一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、應作如
 「松樹千年終是朽、 是觀」とありより出づ。現象物質界の轉變するをいふ 槿花一日自為榮
 槿花一日自為榮 をちこちの土 果つる謂なり。仮名遣は違へども落ちの音に於て續けたるなり。
 をちこちの土 をちこちの土は遠近の意。其土となるとは後に遠土の土塊となり
 蜘蛛子、十文字 兼平唯一人、四方八方に駆け抜け駆け
 蜘蛛子、十文字 通し斬つて廻りし有様を叙す。 自害の手本よと 長門本平家物語に
 へて、馬より前に落ちて貫かれてこそ死にけれ。太刀のさき二尺はかり辛ずりのはづれに出でたりけり」

二番目

兼平

四月

ワキ僧 平(前ハ老船頭)

早次第上

ヨウク

始めて旅を信濃路や。始めて旅を
 信濃路や。本曾のゆくへを尋ねん
 どの本曾の山家より出でたる僧よ
 どの。儲も本曾殿ハ。江州粟津が原まで
 果て給ひたる由承り及びの程よ。かの
 序跡を弔ひ申さるやと思ひ。唯今

粟津原と云ふ處の道行上信濃路や本
 曾のかけ橋名のおよオカ本曾のかけ橋
 名のおよ其跡とよや道のの草の
 陰野の假枕カシ夜を重ねつ日を添ソトへて
 ゆげが程あくぬ江路や矢橋の浦よ
 著るよつり矢橋の浦よシテわたり
 舟の業の導ツヨクぬかざし身シテよりシテ業舟シテや

焚ぬぬ前カよりカいカらカこカのカ舟カ
 其船は便船申カぬカのカ申カ田カ
 矢橋の渡舟よカもカあカ。由カ賢カら入カ業
 積カみカたカるカ舟カよカらカ程カはカ便カ船カはカあカひカら
 まカらカ申カすカもカ業カ舟カと見カ申カしカてカ入カ
 ともカちカうカあカ渡カのカ舟カもカあカ。出カ家カのカ事カ
 よカらカ別カのカ利カ益カのカ舟カをカ渡カしてカ

當つて大山の目とては殿山とては殿山とて
 是れもては殿山とては殿山とては殿山とて
 山王二十社茂りたる峯ハハ王子戸
 津坂本の入家まで残りもく見えては
 諸ものは殿山とては殿山とては殿山とて
 是れもては殿山とては殿山とては殿山とて
 王城の鬼門を守り悪魔を拂ふのみ

あらま。佛乘の巖と申きは傳へ聞く
 鷲の山とて象なり又天台と号する
 震旦の四明の洞をうらせり傳教
 大師桓武天皇と傳ふをうらして
 延暦年中の唐草創我がたつ松と詠
 給ひ。根本中堂の山上まで残りもく
 見えては。是れもては殿山とては殿山とて
 是れもては殿山とては殿山とては殿山とて

とからこまの坂本のらちまてら
かこは麓の當つてまこく本條の影
の目とるいぞ。大宮の在在所橋殿よて
序のらくあつたや一切衆生悉有
佛性如來と聞く時。わらう身までも
頼もしくはのほく佛衆生
痛きの身もたお備もわらも隔らあ

ら。一佛乘の峰よの遮那の指を並
麓よ止觀の海を湛へ又戒の
三學を見せ三塔と名づけ人か又
一念三千の機を現して三千人の衆
徒を置き圓融の法も曇りあまの
横川も見えたりや。さて又麓のさるはや
志賀幸崎のつら七社の神輿の

カレ上

シテ何

地上

● 蜀本

草の梢あるべし。波の水馴掉さ
れゆく程よ。遠かり。白の浦浪の
粟津の森のゆきありてあまた遠か
波の昔あぐらの山櫻の青葉まで。面影
も夏山のうらやゆかや青海の紫舟の
志どくも。暇ぞ惜み。波の寄せよ
寄せよ。幾か。の。粟津の早く著るよ

早上歌

待話

けり粟津の早く著るよ。中入
露をわたく草葉露をわたく
草葉目も暮の夜もあつ。粟
津の原のあまたせの。あつら
吊をんこ。あつら。あつら。あつら
白刃骨を砕く。苦み。眼睛を破り。波
捕を流す。粒は。葉杭は。残花を。乱す

後シテ上
一
声
ク

一、コキト岸ありて、コキトはてしなく、コキト始より、コキト揚あり、
 人と見えたり。昨日の舟人の
シテ舟人、コキトあらぬ、コキト漁まも、コキトあらぬ
地上歌ものゝ、矢橋の浦の渡守、矢橋の浦
 の渡守と見え、われぞあり、同ド
 此舟を、法の舟よひ、あつて、われを、又
 彼岸よ、渡して、たまたま、給へや、クリエげよや

● 獨吟サシモ

有為生死のちまた、あつて、去る事
 早し。老少もつて、前後不同、夢の幻泡影
コキトいづれ、コキトあらん、コキト唯これ、コキト權花、コキト一日の榮
地馬の家、コキトむの、コキトあつらふ、コキト残つた
 もの、コキト七騎とありて、コキト本曾殿、コキト此、コキト江路
コキトより、コキト給ふ、コキト兼平、コキト瀬田より、コキト系りあ
地ひて、コキト又、コキト三百餘騎、コキトありぬ、コキトその後

合戦度りて。又後二騎の討ちあはれん
今^地の力あり。あの松原は落ち行きて。序
腹^ラ呂^ガさ^ハの^ハと。兼平勸め申せば。心細く
も。後二騎。粟津の松原さして落ち
給^フ。兼平申さず。後より馬敵
大勢よて追つかけたり。隊も是はらん
とて。駒の手綱を返せば。本曾殿も
許

ありける。多くの敵を逃れも。汝所
は。あらざるの所存あり。つる故ぞとて
同く返し給へば。兼平又申さず。
口惜し。おは。談ある。まは。本曾殿の
人手のかり給へし事。末代の所取守
た。自害あり。今井もや。と。ま。あ
ら。ん。と。の。兼。平。の。あ。ら。ん。と。の。返

落ち給ふ。さて其後は本曾殿の心細くも
唯一騎。粟津の原のあまたある。松原
さして落ち給ふ。頃ハ睦月のまつ方
春めきあから冴えお入り。比叡の山風の
雲行く空もくのはとり。あやや通路の
末白雪の薄氷。漆田は馬を駆け落し。
引けどもあがらむ打ととも行ぬ。青月の

駒の頭も目もなつかしく何やら
身の果せん方もあへぬはて。たま
自害せよ。やとて。刀は手を掛け給ひ。
さよならも兼平が。行くいとよと遠方の
おとちを見せり給へ。おとちより来り
けん。今ぞ命の概弓の矢つらまつて
内甲みからりと射る。痛手までありま

せだ。た。も。い。も。お。も。い。も。馬。よ。り。も。あ。ら。ま。の
 土。と。あ。る。所。に。い。そ。あ。ら。り。も。主。君。の
 所。跡。を。ま。ら。つ。吊。ひ。て。た。び。給。へ。打。切。げ。よ
 痛。き。ま。い。物。語。兼。平。の。最。期。の。何。と。ら
 ち。ら。せ。給。ひ。け。る。兼。平。の。ち。と。ら。も。
 知。ら。ず。戦。ふ。其。隙。も。最。期。の。所。供。を。
 心。よ。か。く。さ。り。あ。り。た。て。其。後。の。思。を

き。も。敵。の。方。は。聲。き。て。本。曾。殿。討
 たり。給。ひ。ぬ。と。呼。ぶ。ら。る。聲。を。聞。き
 あり。今。の。何。ち。ら。期。ま。で。あ。り。思。ひ
 定。めて。兼。平。の。最。期。の。廣。言。と
 鐘。踏。ん。だ。り。大。音。あ。げ。本。曾。殿。の
 内。は。今。井。の。四。郎。兼。平。と。名。の。り
 かけ。て。大。勢。を。割。つ。て。入。り。ま。す。と。あり。

地拍子
自害の手本として

一騎當千の秘術を現し大勢を粟
津の行は追つめて磯打つはのまくり
切りまはし手十文字は撃ち破り駆け通
つて其のち自害の手本として大刀を
銜へつてさあたまよ落ちて貫かれしせ
よけり兼平が最期の志を目を驚馬か
まおのたまあり目を驚馬かまおのたま

千手

解題

平家物語、源平盛衰記等に申して作れる曲なり。平重衡生捕られて鎌倉に下りし時、頼朝
或は舞を奏せ、兩の一夜を果敢を誓ひに明かしたるが、再び都に送らるる身となりて悲みの中に相別る
右名は千手重衡、又は重衡。金春禪竹の作なりといふ。

能之變式

常刑よりする能の式に野曲之舞あり。此小書附にて演ずる時は、シテの出の次第、
詠の間に幕を出づ。以下詠は常の通りに運び、調詠してぞかなでけり。常のイ口へに代ふるに舞
を以てし、舞ひ上げて直にワカを強ふ。此向再びクリ、サシ、クセの詠全部を抜き。型にも種々變化
段の位を常よりと重く扱ふ例なり。

詠ひ方梗概

婀娜なうら美人が囚はれ人とわたりし却の公達の身の果を思ひ歎き、世の中の
経として織り出いたる趣に詠ひなすべし。多数の三番目物と異り之は所謂現在物。シテ
なれば、同じく幽玄を本として靜に強ふべき中にも執物の情味あるは宜しからず。シテ
て靜に、声調を内にとり、派手くしからぬやう心すべし。幽霊物の如く折へ心を頂るす。次第まづ
とつとつと強ひ出づべく、サシは思慮からべし。ワキとの掛合は稍軽めに扱ひ、ツレとの掛合は後に美
しく鄭重なるを要す。サシは「これは淨理」の一聯の句はツレの心を引き立たしむる心なり。羅城の
重衣たる、「十悪といふ」との二つの調詠の句は一連の調子にて稍寛りと大きめに強ふ。クリは確りさら
りと強ひ、次のサシは氣を更へてさらりとしたる中に物衣なる心あるべし。クセの上端は前後共靜に落
着ありて強ふべきなれど、前のは敢の心、後のは急の心の區別あるべし。ワカは白拍子の句なれば別
心にて長閑に強ふを要しとす。合せて聞けば此一句諸合の趣を寫してしめやかに強ひ、以下凡て
靜に假名美しく扱ひて悄然たる情趣満ちくたらしむべし。ツレ
は品位を保ちて声使ひ溫和なるを要す。但し平家一門中の武將たる事をも心に置くべし。サシは深遠なれ
歎する所なれば女々しからぬを程にて短やかに強ふべし。シテとの掛合はシテの位を枯けながら尚自己
の位を損せぬやう確り強ひ、サシによく慰め給へども以下の受渡は少し運び心に扱ふ。合はいつしか

ては後述の曲と長く寛えて 北野 菅公をさす。北野に祀られたればなり。 此詩を詠せは 平家物語に「此詠をばせん人」とは北野の天神毎日三度かけりて守らんと誓ふ。 十悪といふと 和漢朗詠集に「雖十悪を福引換云々」とあり、極楽寺を獲したる文の森はせ給ふと云ふ。 新撰古今集に「生田川水の秋さく留まて本の葉 梓弓 一句漏て、引かんとに懸る。弓を、うろの下風、々を送る森の下風」とあるを引いて又の傍とす。 川越重房 頼朝の家臣 定のなき哉 後撰集に「神無月ふりみよとす。定のなき時雨を冬の始なりける」と、又古今集に「神無月時雨ふりおける福の葉の名に引くを退降すること云ひなす。」 衆徒 僧 とにしかくにも 萬葉集に「奈良坂のこの多拍の二おもてとを徒として奈良坂に云ひかく。」 衆徒 僧 とにしかくにも 々々にもかくにもねぢけびとの友」といふ歌を借り句を隔て、奈良坂やを受く。以下八橋の蜘蛛の音によせて雲居とつけ、いつか又見ん意にて、三河といひ、却の速き心にて遠江といひ、箱根の箱を開く縁にて明けもやといひ、曉の縁にて、望月夜といひ、さして鎌倉山とつけ、いづれ東下りの途を 燈晴 うして 和漢朗詠集に「燈晴敷行真氏派、夜深四面楚歌也。楚の項叙す。望月夜は鎌倉の地詞なり。」 燈晴 うして 羽が漢軍の重圍の中にて、愛雅真氏に舞はしめし悲痛なる一夜の景と 雲の古枝の 云々 降ると古枝にかけ、枯木にも花咲くと 一樹の陰 云々 平家物語に「千手の前詠せしもの。」 雲の古枝の 云々 いふ親善の誓の原に千手といひかく。 一樹の陰 云々 重ねて、一樹の陰に宿り、あひ同じ流をむすぶも皆これ先世の契といふ。白拍子を滅に面白く歌ひたりと見ゆ。白拍子は素拍子の謂なり。遊遊女が舞ひ、一種の舞の称なりしが之を舞ふ女とも又其歌のみとも白拍子と云ふに是れり。 峰の松風 云々 拾遺集に「琴の音に峯の松風通ふらし何 あさま 朝にかけてあさまと續 きぬ 共舞したる男女の朝の別れに互に衣を着るといふ意の詞にて、此場合にも用ゐる慣はれたれども、いにては早に男女の別離の意に用ゐたるなり。

三番目

千手

三月

ツレ重 衛
ワシテ千手
キ宗 茂

平家
この鎌倉殿の内よ。狩野の介宗茂
まきの。備も相國の侍子。重衡の卿ハ。此
度一の谷の合戦よ。生捕られ給ひぬ也。
某預り申して。朝敵の侍事と申し
ながら。頼朝痛ましく思ひぬ。よく
痛まら申せとの侍事とて。昨日も千手

の前^マを^ツ書^カか^フして^ス。あ^ハの^キ半^ノの^水底^ノを^申
 みる^ハ。手^テ越^シの^長が^女を^さら^る。傳^ハの^カも^カー
 へ^ス。身^ミは^かへ^る。一^ツは^かして^ス。書^ツか^フ
 へ^ス。直^ツは^かへ^る。書^ツか^フ。一^ツは^かして^ス。
 成^ル。ち^カら^い。雨^{アメ}中^ノ。書^ツか^フ。酒^{サケ}を^申
 勸^スめ^申。由^ユは^かへ^る。書^ツか^フ。書^ツか^フ。書^ツか^フ。書^ツか^フ。
 へ^ス。音^ネは^かへ^る。書^ツか^フ。書^ツか^フ。書^ツか^フ。書^ツか^フ。

へ^ス。書^ツか^フ。書^ツか^フ。書^ツか^フ。書^ツか^フ。書^ツか^フ。
 花^{ハナ}の^樹頭^ノは^葉え^る。秋^{アキ}の^目の^水底^ノは^沈
 む^も。世^セの^はら^い。有^ア様^{サマ}を^見て^も哀^{アハレ}
 や^重衡^{ヘイ}の^其の^一。雲^{クモ}の^よ。あ^はり^も
 知^ラぬ^身の^中。浪^{ナミ}は^漂へ^る。舟^{フネ}は^浮か^す。
 有^ア様^{サマ}は^かへ^る。書^ツか^フ。書^ツか^フ。書^ツか^フ。書^ツか^フ。
 有^ア様^{サマ}は^かへ^る。書^ツか^フ。書^ツか^フ。書^ツか^フ。書^ツか^フ。
 都^トは^かへ^る。書^ツか^フ。書^ツか^フ。書^ツか^フ。書^ツか^フ。
 留^{トモ}め^ぬ。書^ツか^フ。書^ツか^フ。書^ツか^フ。書^ツか^フ。

あつち痛ぢや上敷。陸奥の忍ぶよ堪
 ぬ雨の音。忍ぶよ堪ぬ雨の音。降り
 きた女だもさうも思の露も散り
 散つよびのさもささくもささくも
 袖の色もささくもささくもささくも
 けのたぐのたぐもささくもささくも
 申のささくもささくもささくも
 誰もささくもささくもささくも
 千手

の前の美したる由そりて馬申入
 暫らく馬待ちの法様様をもつて申
 身ツレサン上の権花イハレハ百
 の榮命の蜂蝶の定もあはれ似たり。心
 蘇武の胡國は捕をれ。巖窟の内よ
 籠めらして。君邊をたぬ志。その
 やさうりて。謀もて。敵をさほ。着田里よ

小 謠

地上歌

春紅葉の秋誰が思ふにやあつぬらん
 人の心の奥深き其情も都あり花の
 ちがら見えなほらば東のはしりまで
 追風白ひくさの花の都へよ恥ぢ
 妻戸をあらしと押へひらくは空塵の
 なくと請ぎらば其時千手さまのうて
 ありたがあらしにねの事あてむも唯りか

ツレヨ

申へしは朝敵の事事あひ私やしては
 ほへるもいとくかへは其由申へて
 家や許へ申へるも敵にめまはる
 ちかきわりの事事あひ私やしては
 はかきわりの事事あひ私やしては

いひつた
トモ

地上敷

思入た。世の空蟬の唐衣。世の空蟬
 の唐衣。まづ。馴れぬ。妻ある。都の
 雲居を。まは。あは。は。ま。め。旅
 ち。そ。思。入。衰。入。の。身。の。果。を
 悲。き。水。行。く。川。の。八。橋。や。輪。手。は
 物を。思。入。と。ら。あ。け。ぬ。情。の。あ。ら。く。は。馬
 も。恨。あ。ら。ん。馴。れ。ぬ。恨。あ。ら。ん。

口平方上

今日の雨の中。の。つ。り。を
 慰めんと。樽を。抱。き。つ。つ。既。に
 酒宴を。始め。んと。す。千。年。も。此。よ
 見。つ。ら。も。あ。ら。ん。重。衡。の。所。前
 目。の。も。あ。ら。ん。今。の。つ。り。は。さ
 かり。の。心。を。あ。ら。ん。思。入。は。ま。も。平。ま。り。ん
 ぎ。の。あ。ら。ん。思。入。は。ま。も。平。ま。り。ん

いふよ何れも所着もときらむら
 其時千手とりあへぎ 羅綺の重衣
 たる情もあつことを機婦よねたむ
 唯今詠し給ふ朗詠のまただけあも
 北野の由作此詩を詠せば聞くるま
 ても守るべしとの由誓あり
 から重衡ハ今生の望あり 唯来世

半三入中

の便こそ聞かまほしけれと宣へば
 ちらむや作らひたまはらう 十悪といふ
 ともろ攝まこと 朗詠してぞあめで
 けるも備も彼の重衡ハ相國の末
 の子と申せども 兄弟も勝れ
 一はもいそいで 父母の寵愛限あり
 かしとも時らうり 平家の運命ことごと

●高吟サシキセ
シテサシキセ

橋の雲居の都りつまた三河の
 國や遠江は是栢箱根うちまききて明け
 もやまらし星月夜鎌倉山より
 かな憂を限ぞと思ひしよ断るれが
 こも忍び音よあまた昔を思ひ妻の
 とも一々暗うしてハ數行虞民が
 涙の雨をくちぬる夜の空 四面は林く

歌の聲のうち何れも舞の袖
 思の色よやせぬらん涙を添へて
 めぐらまよも雪のあつその枯れてたよ
 花咲く千手の袖あらば思をねてらや
 かくさん 恋のめや 一樹の陰や
 一河の水 皆これ他生の縁といふ
 白拍子をぞ歌ひける 其時重衡

讀を素きたりといふ。前佛、後佛、佛説に此世界の成立ちたる始より出現したる佛を過去七佛

事は因より無著あり。佛の出現は釋迦を以て終りたるに非ず、未來にも亦あるべきこととせられたり、此次に

現るべきものは即ち彌勒菩薩にして今は兜率天に内院に於れども釋迦の成後五十六億七千萬年に於て安

婆世界より出で、釋迦の後を補ひて人天の化益をなすべしとせられたり、而して釋迦入滅して既に年久し

ければこれを彌勒佛に對して前佛といひ、亦彌勒佛を釋迦佛に對して後佛といひ、又前佛去りて後佛未

だ出でず、兩佛の中間にありて、一切衆生の夢中にさまよへる今の世を夢の中間といふ。う？ 貴 受け難き人身 思ふ心の一筋なると墨深の

き人身を受け、値ひ難き佛教に値ふといへども出離生死 ひとへなる 衣の只とへなるとに掛く。

の思決けて増進菩提の志無し(原文漢文)とあるを借る。 生れぬ光の身云々 一切衆生は本覺真如の實体より無明の爲に本有の覺体を覆障せられて迷ひ出

きて現在一世假りに契りて結ひ 身は浮草をさそふ水云々 文屋原考の三河の圖に下らん

たから親子の恩愛もそこの意なり。 字草の根を絶えてさそふ水あらばいなんと思ふと小町の谷へし敷、古今集に出づ。茲にては 驕慢

其故詞を借用して最早年光いて若かりし時の如く誇ふ人もなきが悲しといへり。 小所自らの容色にはさそふをいふ、玉造小町子社妻高に狂なりし時橋邊最も甚しとあり其言は

一名玉造物語と云ふ。玉造小町と小野小町とは別人なりこと前入云へるが如し(原文漢文) 翡翠翠

カハセミ 婀娜云々 此表考に「婀娜」は揚柳の春風に乱るを誤つ 鶯舌の轉云々 此表考に

春の鶯には早く雪梅を悦懐の下に凝びと玉造小町の榮華の かとことばかり かりば めづらし

様を記せしを借りて物言ひの美しき言に受へ用ひたり。 今は民間云々 昔は雲上に榮華を極めし今は老衰本居りて

見らうも射か 若しもそれと云々 若しも誰か知る人ありてあれが小町の果よと 人目つまやりの

しとなり。 夕暮の月と共に西 雲居百敷、大内山 縁にて雲といひかく。 大内山の山守 兼中守

に向ひて都を出づ。 士。神政の故「人これぬ大内山の山守も本が

くれ下のふ月を見る哉を借りて文の縁とす。 意塚 京都近郊下鳥羽にあり、家

名勝。秋より月に、月より桂 梵瑤の香波にて暮しては塔又は塔邊といふ。もと教專入

に、桂に續けて桂川にわく。 辛都婆 曠の時諸王具遺骨を合を供養の志諸處に建立したるし

のくに墳墓又は廟を意味するものなれども、後世俗には單に柱又は板に五輪の塔の形を模し、死者供

養の爲に建つるものとなれり。小町の標かけたるも此種の木に形みたる塔邊なりしなり。 教化 教へ導きて通を

云々 金剛薩埵は眞言付法八記の中の第二祖、大日如來に灌頂を受け其現法を結集して後に傳へたる者

は諸佛菩薩の本來の誓願を標示したる形といふ意にて、我國密教にては五輪の塔邊(辛都婆)を辛都婆

日如來の三摩耶形といひ、甚深の意義、無量の功德を備ふるものとして尊崇せり。今こゝには、辛都婆は金

剛薩埵が依に世に顯れり本尊大日如來の誓願 地水火風空 万有の性の成を五方面より觀測し

を形の上に標せしものなりと境けり。 燭性火と、動性を風と、無礙の性を空とす。大藏法教に此五種性偏知處、故名爲大」とありて

之を五大と呼べり。一切の物此五大を具へざるもの無しとせられたり。五大は亦五輪といひ、五輪を形し頭

して、地を表する方形、水を表する圓形、火を表する三角形、風を表する半月形、空を表する如意珠形

水大風空と著へたるを、小町愛に奪ひて吾人の肉體も亦五大五輪 心功德は云々 佛は再び説いて、

に外ならざれば、辛都婆と人の体と何の隔あんと云ひたるなり。 一見辛都婆云々 辛都婆には無量無邊の功

之を形より見れば同じく五大五輪をもくもく其を藏 一念發起云々 小町愛に經文の句を引きて及敷す。華

する意義、又は勸果の上より見れば同一をさすといふ。 佛尼の姿を求めんとす。 佛を轉じ理を離れて理を視く。尼に教さ

之を揮する者は永遠に地獄、餓鬼、畜生の 佛尼の姿を求めんとす。 佛を轉じ理を離れて理を視く。尼に教さ

三惡道の苦患を免れ得べしといふ經文の句。 佛尼の姿を求めんとす。 佛を轉じ理を離れて理を視く。尼に教さ

佛を遣するに勝る。寶塔は破壞しを廢塵となす人も菩提心熱すれば成佛すとあるを 佛尼の姿を求めんとす。 佛を轉じ理を離れて理を視く。尼に教さ

引きて菩提心の辛都婆に考らざるといへり。菩提心とけ心覺佛果を求めんとす。 佛尼の姿を求めんとす。 佛を轉じ理を離れて理を視く。尼に教さ

云々 佛尼の姿を求めんとす。 佛を轉じ理を離れて理を視く。尼に教さ

とてん臥したる云々 佛を轉じ理を離れて理を視く。尼に教さ

たりと見るは心復し、辛都婆既に射して

云々 佛を轉じ理を離れて理を視く。尼に教さ

云々 佛を轉じ理を離れて理を視く。尼に教さ

云々 佛を轉じ理を離れて理を視く。尼に教さ

云々 佛を轉じ理を離れて理を視く。尼に教さ

云々 佛を轉じ理を離れて理を視く。尼に教さ

云々 佛を轉じ理を離れて理を視く。尼に教さ

云々 佛を轉じ理を離れて理を視く。尼に教さ

云々 佛を轉じ理を離れて理を視く。尼に教さ

云々 佛を轉じ理を離れて理を視く。尼に教さ

云々 佛を轉じ理を離れて理を視く。尼に教さ

云々 佛を轉じ理を離れて理を視く。尼に教さ

云々 佛を轉じ理を離れて理を視く。尼に教さ

云々 佛を轉じ理を離れて理を視く。尼に教さ

云々 佛を轉じ理を離れて理を視く。尼に教さ

云々 佛を轉じ理を離れて理を視く。尼に教さ

云々 佛を轉じ理を離れて理を視く。尼に教さ

云々 佛を轉じ理を離れて理を視く。尼に教さ

云々 佛を轉じ理を離れて理を視く。尼に教さ

なま〜受け難き入身を受け受け。逢ひ
難き如来の佛教よあひ奉る事。これぞ
悟の種あると思ふ。心も入るも墨の
衣の身をあてて。まじぬかからの身を
知りて。まじぬかからの身を知りて。憐む
べし親もあ。親のあひに。我が為よ。
ちやいむむむむ。千里を行くも遠

シテ次第上
身は浮草を水に身を浮草を水に
水を流して悲ありけれ。あをれや
げよ吉入の橋。慢もつらも甚。翡翠
の釵の柄。柳とたをやうして。揚柳の
春の風は靡くら如。又鶯舌の轉

散りて露を念める糸裁のちいしむあつては
 散りてむしむる花もいも猶めりらや今ら
 民間駈の目かみかたあまの諸人は恥
 ぢをら。嬉しからぬ日日身は積つて
 百年の姥とありては 下敷中 都の人目
 へあはれもあはれもさくらもまぐれ
上敷 月ぬりぬりもあはれいへ月ぬりぬりも

昔はへ。雨は百敷や大内出の山守も。
 あつて身はかみ身はよもあはれも本隠れて
 ありあや鳥羽の徳塚秋の山月の桂の
 川瀬舟はかみへへに舞ゆるこもあはれへ
 へに舞ゆるこも。あはれへは舞ゆるこも程よ。
 へに舞ゆるこもあはれへは舞ゆるこも
 思ひる 羊 のあはれ目の舞ゆるこもあはれ

42425

42

けて墨の紅の宛轉なり。雙蛾も遠
山の色を失ふ。百年より一年たらぬつく
も髪から思ひ有明のかけ恥かき
我が身か。頭は懸けたる袋より
ある物を入れたるぞ。今日も命の知
らねども。あまの飢を扱けんと粟豆
の乾飯を袋に入れて持ちたるよ

後より買入る袋より垢膩のあつける
衣あり。臂は懸けたる筈より白黒
の意姑あり。破れ蓑。破れ笠
面を切りも隠さね。ありて霜雪
雨露。涙をだよも抑さるべき袂も
袖もあらぶこそ。今ハ路頭よさらひ。
往來のくは物をとふをひ得ぬ時ハ

●獨吟
或ハ
物著 淨衣の袴かい
とつてまへ淨衣の
袴かいとつて 地
鳥帽子と

何時ぞ夕暮。月こそ友よ痛ひ路の閑。
守らありともまらまらやとでたさん。
淨衣の袴かいとつて 淨衣の袴かい
とつて。立鳥帽子をかぶり狩衣の
袖をうちあつらへて。目忍ぶの痛ひ
踏の目も行く。闇も行く。雨の夜
も風の夜も。本の葉の時雨雪深。

軒の玉水とくくと合行きてる帰。
あつては行き一夜二夜三夜四夜七夜
八夜九夜。蠶の明の節會も。逢を
てぞ通し鶏の時をもあぐも。暁の榻の
は。あきの百夜までと痛ひて。九十九夜
よありたり。あら苦し目まひや
胸苦しやと悲みて。一夜を待たで

不合ツヨク

地

死シたりチ。漂ヒ草クサの少將シヤウシャウの。其オノ怨ウラミ念ネンが
 ありける。砂サを塔トウと重ねて。黄金オウゴンのはだ
 へまがやうカテに花ハナを佛ブツの手に向けつ。悟ゴの
 道ミチよりミチらうミチよミチ。悟ゴの道ミチよりミチらうミチよミチ。
 後ノチの世ヨを願ネガふぞ真マコト
 なるキリヤ。

紅葉狩

解題

平維茂を遊引て戸隠山中に入り、紅葉狩せる一團の美女に引き止められて踊らされた。戸隠山、有解盜、伴作婦人、維茂、又若夜又假面初之、維茂智殺と記した。後右山中に出た。義が斬りたりといふ戸隠の鬼(若平記)も共に惟茂は山賊の徒なるべし。されども浮世曲作者は傳説に従ひ、長とて武名高く後に鎮守府將軍に任ぜられて世に餘五將軍と呼ばれたら文吏なり。

能之變式

謡ひ方梗概

シテ 前は美女なり。之は前後共数人のツレ出で、形装束等常型と異れり。にも心はかり強味を合ふ趣ありて常の女性の如くは優雅を本とせず。静なり。まづ次第を静に謡ひ出づべし。サシは位を保ちつ。精さうりと綺麗に運び、下歌は調子を直してサシを。上歌は朗かに出、返りより返り無く素直に謡ふ。げにや敷をらぬ。ハサシの調子にて、さうりと。したる中に志はらしき心を養めて謡ふが宜し。以下ワキとの掛合あまり静めず、しとやかに振舞ふ心根を程とすべきなり。林間に...のサシは唯すらりと扱ひ、クセの ツレ 素直はシテのみにて謡ひを。上端は少し受へて位静か進む。ワキは氣をかりて華やかたを。ツレ 常とすれどもツレ一人其連吟の聲を流ふも宜し。此場合には上歌の初のは通しはツレのみ強ひてシテはせず。ワキ 餘り位を重く取ることは好まざれども、或人なれば唯上歌は運びて勢よく風変たら概あらず。音の移りを意切れよく扱ふ。ワキツレとの問答は、はきり。とあらず。あれは雅も...以下シテとの掛合は初も前も強みを本としてさうりと扱ひ、「此世の人とも...は締めて謡ふ。後には心氣一轉位を進め、あらあましましや...と運んで。ワキツレ 一声は静を精大。注ふ。「維茂サしも...」の一句は前後の受渡しもさうしサシ地めりて、上歌は急がず静に。めてさうりと運んで強々と謡ふ。位は軽く、音調は 地 初地馬よりおきて...の上歌は急がず静に。軽からざるべし。詞は長くして運びよきを宣しとす。

紅葉狩

雲とあたにはは「山姥」よと見らるるまのまぢもこそ
 才れなどの語調を借り、他人の才前を耻ぢたりたり。
 意。こゝには前の辞を受けて露ほど(うづら)の詞の
 端にも行く末かけて種むといふなり。女上りの詞なり。
 と云ひかけて「白雲の語を起し、雲の縁にて「まぢあつらへる」と云ふ。
 心の安からず感へると、立ち去り思ひ感へるとにかけたり。
 声すなり散るかまさきの葛城の山」とあつらへる用ひ、時
 移り思ふもて四圍の光景津涼になりゆく様を寫す。
 厭ひたれば其縁にて「夜かけて」といひ、
 夜より月に、月より雲に云ひかけたり。さす袖も云々
 音を廻らすとは「廻音」といふ舞の曲名と文選に出でたり。
 廻音の句とによりて「廻音」を舞ひに對し云ひ慣はしたる詞なり。
 天の詩句に「不堪紅葉青苔地、又是涼風暮雨天」とあつらへる引きと舞曲の歌詞とし、又次の文を起す序辭とせり。
 意は紅葉散り敷ける青苔の地のさうなれたに感懐に堪へざるに、かへり加へて冷き風吹き渡り夕暮の空に秋雨の
 降りしきることよと致しさを嘆じたりなり。
 「秋雨中聽元九」と題せらるるの、一節なり。
 夢はし覺し給ふなよ
 夢を覺し給ふなよ。夢を覺し給ふなよ。夢を覺し給ふなよ。
 ちのたづきし知らぬ山中に覺來無
 エシテ一度作り物の中に隠り、あ
 ちのたづきし知らぬ山中に覺來無
 中の神託を任言に云はしめ、後段を起す端緒とせり。
 無明の酒々
 酒は人の心の明を奪ふが故に無明と云へり。
 能にては戸隱明神の末社に於きたる程
 風を立ちこち
 風の落るにかけり若今集の「立ちこ
 ちのたづきし知らぬ山中に覺來無
 維茂の鷲も覺めたる詞に後段の舞を開からしめたり。
 風を立ちこち
 風を立ちこち。風を立ちこち。風を立ちこち。
 くと「守子鳥裁」の歌を引き、人界を遠く離
 化生 變化 威陽宮の烟の中に云々
 威陽宮の烟の中に云々。威陽宮の烟の中に云々。
 れたら深山の折からの凄じき様を述ぶ。
 威陽宮の烟の中に云々。威陽宮の烟の中に云々。
 を焦したりといふ威陽宮の烟を云ひて鬼神の降らす火輪に喩へ、威陽宮の縁にて荊軻
 が始皇を龍かひし時始皇の羅り逃したるといふ七尺の屏風の辭を用ひて鬼神の形の大なるに比ぶ。
 木」を云ふしとの説もあれ
 と據ら所あると聞かず。

五番目

紅葉狩

九月

ツツレ 女(四人又三人)
ワキ 鬼女(前ハ女)
シツレ 平維茂
ワキ 従者(セウタイ)

シテ次第上
ヨウク

時雨をいそぐ紅葉狩。時雨をいそぐ
 紅葉狩。深き山路を尋ねん
 此あたりは信む女まての
 びよあから
 へて浮世よ信むも今はや誰白雲の
 ハ重葎。茂れ宿のさみきよ人こそ
 見えぬ秋の末で。庭の白菊うつろふ

紅葉狩

色も夏は身ミの類タガとあはれありあ
 まりたみミかみまミひヒきキひヒを眺め
 つ。四方ヨウの梢サエもあつちよト伴トひ出
 づ。道ミチのへヘの草葉クサエの色イロも日ヒは深コひて
 下紅葉シタカキ。夜ヨの向ムカの露ツキや深コめつらん。夜
 の向ムカの露ツキや深コめつらん。葦原アシハラの原ハラは昨日
 より。色イロ深コき紅ベニを分ワけ行ユく方カタの山ヤマふ

●小話

上歌

打切ヤ

かみげカミゲよヨや谷タニ河カハよ風カゼのあけたるアケタル柵セキは
 遠トホれもモやらぬヌもモなナをヲ渡ワタらズ錦ニシキ中ナカ
 絶ツクえエことコトまマづヅ本ホのノもモよヨまマちチ寄ヨりリて
 四ヨ方ウヘのノ梢サエをヲ眺ノゾめてテきキざラくク休ユみミ給タへヤ
 面白オモシロシやヤ頃キタマハ長ナガ月ツキ二十ニジュウ日ニチあアまマりリ。四ヨ方ウヘの
 梢サエもモ色イロしシよヨ錦ニシキをヲ色イロしシよヨ時トキ雨アメぬヌれて
 や鹿カのノ獨ドク鳴ネくク聲コエをヲきキるル狩カ場バのノ末マタ

口サシ上
ツヨク

此上歌ハ能ニテハ
ワキニ形アルタメ
ワキツレノミニテ
語アリ

げの面白き氣色ありキキイロ 明けぬとてアキヌトテ
 野邊よりよほく鹿の跡吹き送る風ノノヘヨリヨホクカノアトフクキユルカゼ
 の音よ駒の足ありノネヨコウノアシアリ 勇むありユムマリ
 らぢぢやなむらむらの様ラヂヂヤナムラムラのサマ ぢぢぢぢヂヂヂヂ
 の様らむらむらの野の薄露分けて行くノサマラムラムラのノノウスロウマキリテイク
 も遠き上あびの鹿垣の道モトホシノカミアビノカ の道ノミチ
 ありアリ 鹿の聲カ ありアリ 風の行カゼノイキ

げの面白き氣色ありキキイロ 明けぬとてアキヌトテ
 野邊よりよほく鹿の跡吹き送る風ノノヘヨリヨホクカノアトフクキユルカゼ
 の音よ駒の足ありノネヨコウノアシアリ 勇むありユムマリ
 らぢぢやなむらむらの様ラヂヂヤナムラムラのサマ ぢぢぢぢヂヂヂヂ
 の様らむらむらの野の薄露分けて行くノサマラムラムラのノノウスロウマキリテイク
 も遠き上あびの鹿垣の道モトホシノカミアビノカ の道ノミチ
 ありアリ 鹿の聲カ ありアリ 風の行カゼノイキ

ぎの誰ぞとも知らず給ふぬ道への入の。
 便のさきし業のう給ふあー思ひ^早からま
 の馬車^{カニト}を^{カニト}。こ^{カニト}ーもあつてもあつて給ふ
 ちか^{カニト}ちか^{カニト}あつてもあつて思ひ^{カニト}たつて
 情もの馬車や。一村雨の雨宿り^早。一樹
 の陰よ^{カニト}ま^{カニト}ま^{カニト}あつて^{カニト}。上^{カニト}の^{カニト}後^{カニト}を
 酌む酒を^{カニト}。こ^{カニト}で^{カニト}見^{カニト}ま^{カニト}て^{カニト}給^{カニト}ふ^{カニト}あ^{カニト}と^{カニト}取^{カニト}あ

一あつらひの^{カニト}袂^{カニト}よ^{カニト}ま^{カニト}あ^{カニト}り^{カニト}留^{カニト}む^{カニト}こ^{カニト}ど^{カニト}あ^{カニト}つ^{カニト}
 岩^{カニト}本^{カニト}よ^{カニト}あ^{カニト}い^{カニト}は^{カニト}く^{カニト}ひ^{カニト}弱^{カニト}く^{カニト}ひ^{カニト}ま^{カニト}つ^{カニト}岸^{カニト}の^{カニト}
 所^{カニト}の^{カニト}山^{カニト}路^{カニト}の^{カニト}菊^{カニト}の^{カニト}酒^{カニト}何^{カニト}も^{カニト}昔^{カニト}一^{カニト}あ^{カニト}ひ^{カニト}あ^{カニト}。
 け^{カニト}よ^{カニト}や^{カニト}虎^{カニト}溪^{カニト}を^{カニト}ま^{カニト}ま^{カニト}こ^{カニト}ー^{カニト}の^{カニト}あ^{カニト}ひ^{カニト}ま^{カニト}。
 ち^{カニト}が^{カニト}捨^{カニト}て^{カニト}あ^{カニト}た^{カニト}ま^{カニト}入^{カニト}の^{カニト}情^{カニト}の^{カニト}盃^{カニト}の^{カニト}深^{カニト}き^{カニト}契^{カニト}
 の^{カニト}た^{カニト}め^{カニト}と^{カニト}あ^{カニト}あ^{カニト}。林^{カニト}向^{カニト}の^{カニト}酒^{カニト}を^{カニト}煖^{カニト}めて
 紅葉^{カニト}を^{カニト}焼^{カニト}く^{カニト}と^{カニト}あ^{カニト}あ^{カニト}。ひ^{カニト}の^{カニト}面^{カニト}白^{カニト}や^{カニト}所^{カニト}から。

紅葉時

五

巖の上の苔筵。わたく袖も紅葉衣。
 のくれある深き顔。せの世の早。此世の人。
 とも思はしむ。胸うち騒ぐさありあり。
 露があらだも入ふ。乱るあし竹の葉の。
 盃よ。向くさあさひもあま。たれが佛も。
 戒の道の様。多ひひと。殊は飲酒を。

●仕舞

破るあや邪嬭。女語ももろもろ。おれ。
 心のたづね。もろ海にまたせよ。たぐ。
 ひあらのの上。櫻よ。その目も目も。くら。
 あらん。まよおの。や思ひ。い。ま。い。も。
 前世の契。淡からぬ。深き情の色。目も。えて。
 かしこも。ち。ち。ち。の。道。の。人。の。草。葉。の。露。の。
 かしこも。ち。ち。ち。の。道。の。人。の。草。葉。の。露。の。
 かしこも。ち。ち。ち。の。道。の。人。の。草。葉。の。露。の。

契るもはらあらちりけよ人の心も
 志ら雲のさちあつら入る氣色あを
 かくて時刻も移りゆく雲よ嵐の
 聲もあつ散らまなまの葛城の
 神の契の夜あけて月の盃を袖も
 雪をめぐらま袂をあ堪へぞ紅葉
 だへぞ紅葉青苔の地堪へぞ紅葉

●簡外

シテワカ上

中ノ舞

青苔の地又これ涼風くゆく空よ
 雨らち濺ぐ夜嵐の物凄き山陰よ
 月待つ程の轉寝よ片く袖も露
 涼。夢さる。覺えま。給よあよ夢
 ち。覺えま。給よあよ。

來序中入

早上

ツヨク

江草守

カ

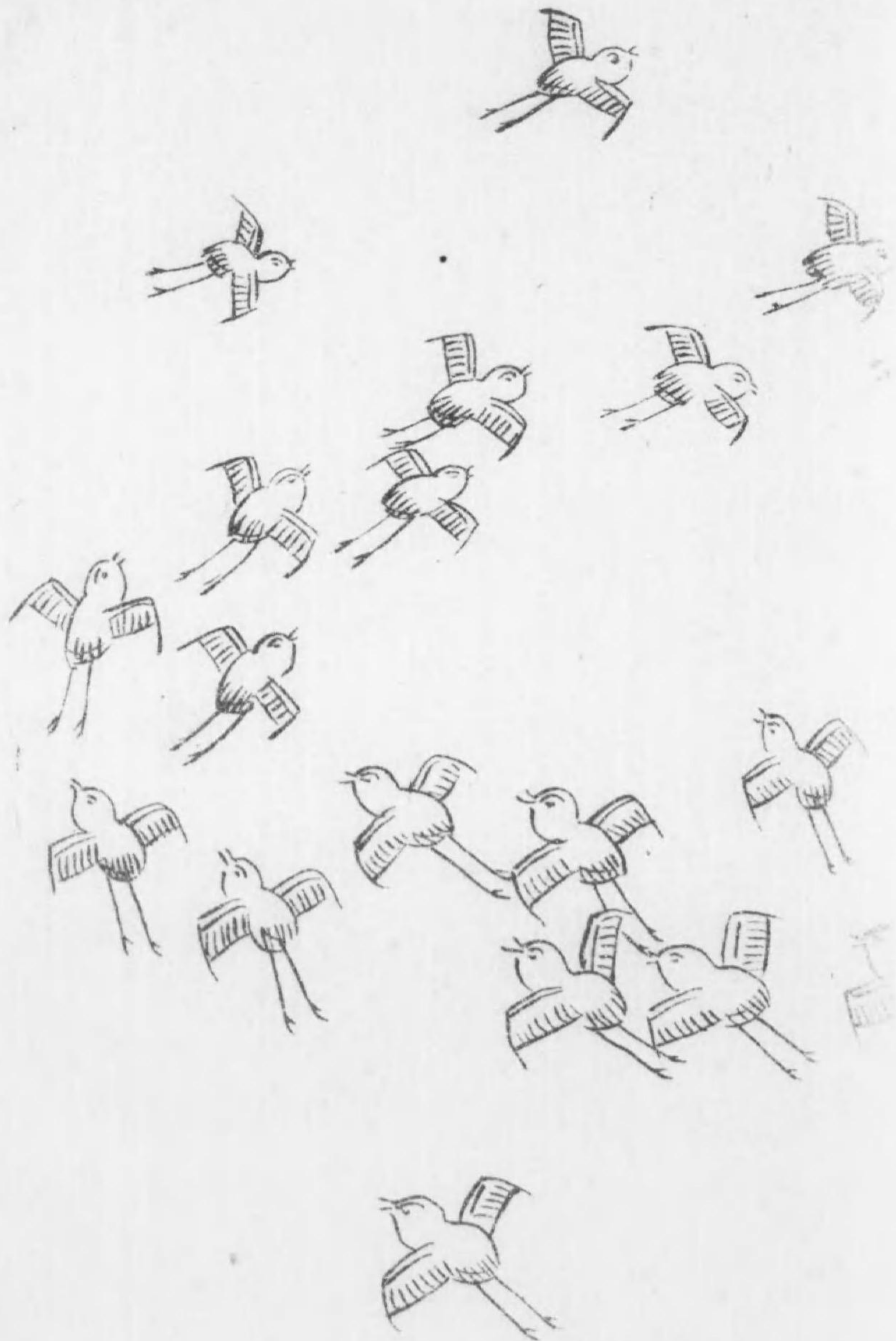
飛んであつた。飛びちぢむぎと組み
 鬼神のまゝあつた。刺し通して所を頭を
 搦んであつた。斬うはらひ
 給へ。鋭く忍んで敵へのほろを。一
 おろし刺し通し。鬼神を従へ給ふ。
 威勢の程を恐ろしけれ

大正十年三月二十日印刷
 大正十年三月二十五日發行
 親世流改訂謹本
 第四版・大正版



訂正者 丸 岡 明桂
 相續者 丸 岡 明桂
 東京市神田區今小路三丁目九番地
 發行所 土居源太郎
 東京市神田區東松町十二番地
 印刷者 鈴木彌作
 東京市神田區東松町十二番地
 印刷所 信英堂印刷所
 東京市神田區今小路三丁目九番地
 發行所 親世流改訂本刊行會
 電話九段 二二〇五番
 振替東京 一三四七五番

270
pg 1
175



終

